24 中世哲学・宗教史

24-6 ※(欧州)中世宗教史

マルチン・ルーター（Martin Luther）

（1483—1546）は一四八三年チューリンゲンのアイスレーベン（Eisleben）に生れ、幼年時代をマンスフェルド（Mansfeld）ですごし、ギムナジウムを了へてエールフルト（Erfurt）の大學に入つた。一五〇五年彼が廿一才の時、友人が落雷のため死し、彼はそれによつて大きな衝撃を受け、両親の熱烈なる反對にも拘らず、宗教的衝動は彼を駆つてアウグスティ

ヌス派の修道院に入らしめた。後ウィッテンベルグ（Wittenberg）大學の教授となつて神學を講じてゐたが、偶、ローマ法皇レオナ世（Leo X.）が免罪符を発行し、それを賣却する行商隊が彼の教区に入るや、彼は有名なる「九十五ケ條論題」をウィッテンベルグ城教会の門戸高く掲げ、その不当なることを論じた。時に一五一七年十一月一日、北の時より所謂宗教改革の幕は切つて落された。しかし下ルーター自身は當時法皇權そのものを否

定しようとする心持はなく、況んや新しき宗派を立てようといふ野心等は毛頭なかつた。

然るにエク（Eck）博士より討論の挑戰を受け、ルーターは彼自信の信念が口ーマ教會の組織と矛盾せることを承認せざるを得なくなるに及び、遂に彼は口ーマを相手として戰ふ決心をした。茲に於て彼は著名なる三大著作「ドイツ國民の貴族に與へ」「キリスト教的階級の改善を論ず（Zu den christlichen Adel deutscher Nation von der christlichen Stande

Besserung）」、「教會のバビロン幽囚について（de captivitate Babylonica ecclesiae）」、「キリスト者の自由について（Von der Freiheit eines Christenmenschen）」を出版して自己の立場を闡明した。一五二〇年十二月には法皇の破門狀をウイッテンベルグに於て燒却し、その為めにウオルムス（Worms）の國會によつて處刑の宣告を受け、次いで行はれたニユルンベルグ（Nürnberg）の國會に於ても同様の決議を受けたが、ウイッテンベル

グに歸る途中ワルトブルグ（Wartburg）城主の好意によつて庇護せられ、その間に新約聖書をドイツ語に飜譯した。其後宗教改革がルターの意に反して政治的爭ひ、乃ち百姓一揆に利用せられるに及び、彼は一揆の鎮圧に力めた。以上の經過は周知のこと故、梗概を述べるに止め、直ちに彼の根本的確信の敍述に移らう。

ルターの出發点は自己の安心立命にある。彼の関心の中心は、社会、國家を如何にすべ

きかといふことでもなく、また知識によつて神、宇宙、自己等の本質を理解するといふことでもなく、個人としての自己が如何にしては神に救はれ得るかといふことであつた。彼はアウグスティヌス教團の一修道僧となつて、ひたすら、管自己の解脱を求めて難行苦行をした。外界との交通を絶つて或ひは祈禱し、或いは斷食し、或時は僧房の床の上に失神して倒れることもあつた。彼はエラスムスハルト、乃ち有名なドイツ神學（Deutsche Theologie）の著書に

一綴治寶組合特製
10×25

従ひ、禁慾・行績・思想等によつて邪念を絶
ち、神人合致の境涯に到り得るものと信じ、
真面目に克苦精勵した。しかし乍ら彼は自己
を征服しようとすればする程、その困難なこ
とを感じた。如何に身心を苦しめても何処か
らともなく邪念妄想が湧き来つて彼を悩ませ
た。かくて修業中は常に、是でも足らぬ、是
でも足らぬといふ不安の情に制せられ、結極思
は自分には自由意識がなくして常に邪念の因
果に束縛せられて居り、自分は神と全く本質

を異にするものであるといふことを深く感じた
のである。彼は當時の狀況を回想して次の如
くこふ、「當時自分はまともにキリストの画
像の前に立つて之を見上げることが出来なか
つた。之に対する時には何時も恐ろしい人の
前に出たといふ不安がある。当時自分には神
を慈悲に富める父とは如何にしても考へられ
ず、所時も虹の上に立つ審判者、石時には窮
る更む可き典獄か絞刑吏（Stockmeister und
Henker）の如く思はれてならなかつた。」

蓋し彼がエツクハルトの流れを汲むドイツ神秘主義に満足し得なかつた所以は、彼が靈肉の対立を強く感じ、肉を支配し切れぬといふ感情と共に常に恐しい神に威嚇せられてゐることゝ、即ち又外的な被造者感情（Creaturgefühl）が強かつたことゝ、彼が個体として の自己を強く感じてゐた為に、対立の世界を無なるものと見做すエツクハルト等に従ひ得なかつたことに依る。かくして彼は直接に聖書を研究し、又アウグスティヌスの「告白」

からヒントを受けるところがあつて、遂に口マ書の一章一六―一七節にある「我は福音を恥とせず、この福音は凡て人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得さする神の力たはなり。神の義はその福音の中に顯れ、信仰より出でゝ信仰に進ましむ。録して「義人は信仰によりて生くべし」とあるが如し」から妙諦を得、在来の自力主義を捨てゝ、神の恩寵による信仰を通じてのみ安心を得るといふ確信に到達した。此所に於て彼は「忽ち

一般消費組合聯盟

10×25

新に生れたやうに感じ、さながら樂園の戸の解放せられしを發見したかの如くであつた」と云ふ。即ち吾々が救はれる動力は吾々にあるのではなくして神にある。吾々に信仰を授けるカは神の言葉であり、それは直接な言葉としては靈感、書かれた言葉としては聖書、有形的の言葉としては洗禮、聖餐式等のサクラメントが即ち是である。吾々が信仰を得るや否やも全く神の御心一つであり、人間の善行は全く之に照らぬ、といふかルーターの根

本信念となつた。

斯の如くして得られたるルーターの確信を檢討してみるに、彼の出立点は何処までも個人であり、煩悶の中心は如何にして吾々の主觀的自己意識が客觀的たり得るか、といふにある。而して彼が上述の信念を、如何に理窟で打ち負かされても断乎として守り得た所以は、彼がカトリック・セクト・神秘主義等の主張するところを全力を擧げて体驗して見て、それでは到底救はれることが出来ないといふ

10×25
一銭洋紙組合特製

苦しい経験を経てゐることによる。即ち彼の信念の基礎の確固たる所以は、それが借り物ではなく非常に自己が築いたものであり、而かも単に知識によつて考へただけのものに非ずして、全人格を盡しての体験である点にある。

この点がルーターの強みであり、この体験がある以上は仮令理窟に負けても相手の理窟は誤りである、と云ひ得る権威を持つてゐた。又彼は實際之を主張する強い意思だけを有してゐた。しかしながら此の基礎は、在来のキリスト教

では解脱し得ないといふ云はゞ消極的なるものである。それならばそれ以上どうするか、といふ積極的な方面に於てはルーターは全く自由ではなかつたと云はねばならない。即ち彼は、在来のキリスト教ではやつて行けないといふ処に立つた時に、全然キリスト教と離れて自分だけで新しい途を開拓しようとする方向をとらざるを得なかつた以前にセクト乃至は神秘主義等の主張するところを真面目に體験して見たと同様に、キリスト教の先覺者たるパウロ

、アウグスチヌス等の立場を身を以て体験して見、遂にパウロの教の中に安心の基礎を見出し、それによつて現在のキリスト教を改革しようとしたものである。従つて彼は何處までも改革者であつて、所宗教の創設者ではない。

彼の積極的主張、即ち「吾々は善行によつて救はれるのではなく、神を信ずることによつてのみ救はれる。しかも神は愛の神であり、キリストの贖罪あるが故に、吾々は如何に罪深くとも信仰によつて救はれる」といふ

考へは、本来ユダヤ式の、大いなる神の前には吾々個人は無に等しい、といふ思想形式に基くものであり、ユダヤ風の傾向ある人にして而かも直接に神にぶつかつた人であつて初めて体験することが出来、又安心の基礎とすることが出来るものである。ルーターにこの安心があつたかどうかは疑問である。

白分がルーターの主たる著作を讀んで得た一般的印象によれば、彼がかいる積極的主張をなすに當つては、其の説くところが消極的の場合

に於けるが如き権威を持たないやうに思はれる。蓋しルーターは、パウロ・アウグスティヌス等の如く異教徒よりキリスト教に改宗したものではなく、最初からキリスト教の範圍内で自己の解脱を求めたものであり、其所にはどうしてもキリスト教の傳統といふ色眼鏡を通して見てゐるところがある。彼は何時でもパウロといふ権威を持ち来り、然らざる時は直接に神の言葉として聖書を引用する。何處までも他人の体驗が権威であって、どうも

しつくり行かないところがある。思ふにルーターにはキリストやパウロの如くに、聖書の教ふるところ神の天然なりと確信せしむ可き際立つた体驗がないやうである。キリストには少くとも晩年に於ては、自分は普通の豫言者とは異つた救主である、といふ自信があり、パウロには夕マスコに行く途上の体驗がある。従つて彼等の言ふところには権威がある。ルーターにはかいる体驗が一生欠けてゐたやうである。此の関係から来たもの

思はれるが、とにかくルーターの考へは純粋にユダヤ式のものではない。彼は形に於てはユダヤ的思索形式をそのまゝ續けてゐるにも拘らず、その説明の間には自からユダヤ式とは異つた思索形式が表れてゐる。ルーター個人の自覚としては彼の説は原始キリスト教の復活であらうが、出来上つた結果から見ると自らその間に彼独自の思索形式を以て主観と客観の対立を調和してゐるのが見受けられる。

↑その最も著しいものは、神の語に関する彼

の考へである。

ルーターの神の言葉といふ考へは極めて捕捉し難いものであるが、以下之について少しく述べて見る。神の言葉は、主観的に云へば、即ち各々人間の立場から云へば、それが各々に働きかけて各々に信仰を引起さしめた瞬間に於て存在する。即ち神の言葉が各々に働きかけてゐる間に各々は之を認識することが出来る。しかしそれは各個人から離れて客観的に神によつて與へられたものであり、それ自

身敬清力を有するものである。従って仮令それが個人に働きかけぬ時に於てもそれは実在する（Wirklich）ものであり、何時かは働きかく可き可能性を有するものである。故に神の言葉は吾々に働きかける限りに於てのみ認識せられるところのもの、即ち主観的なるものであるが、（同時にそれは個人に働きかけると否とに拘らず実在するもの、即ち客観的なるものである。神の語が吾々に働きかけるといふことは神から見れば恩寵、吾々から見れば信

仰である。其の瞬間に於て主観的な信仰は客観的な恩寵の中に取入れられる。其の瞬間に於て、本来別々な存在である神と人とが相交通する。心理的に云へば、自己の罪深さことを切実に感じ、自己が神と違ったものであることを自覚して深くこを悲しむと同時に、其の罪が神に依って宥されるといふ歓喜の情、神の恩寵に浴してゐるといふ感謝の念が生ずる。かゝる瞬間の継續が即ち信仰生活である。斯の如きルーターの考へは、主観と客観と

を出来るだけ接近せしめ、両者の境界線の上に立つて、主観的にして同時に客観的なる立場を獲得せむとするものである。此の場合に於ける神は神の本質そのものではなくして、言葉を通じて働きかける限りに於ての神であり、此の場合の人は具体的なる個人ではなくして、神に対する限りに於ての人である。即ち吾々と神との間に主観的にして同時に客観的なる第三帝國を造り、其の中で両者を交通せしめたと云つても良いものであらう。ルー

ターは斯の如く神人両界の境界に立つて不断に努力するところに窮極の実在性（Reality）を認めたものであり、その思索形式には又かヤ的のそれとは異つたものがある。彼の考へには、本體を活動と見るドイツ独有の考へが表れしぬると云はねばならない。

此の立場は主観と客観との境界線に立つといふもしくは実在問題を離れて第三帝國の住民として交通するといふ極めて際どい綱渡りであり、主観的なるものが客観的たり得るやあや

一橋消費組合謹製

10×25

といふ不安が常に伴ふものである。此の不安を押へてゐるのが彼の豫定（Prädestination）の考へである。即ち主観的には信仰によつて吾々の意志が神の意志の中に取入れられることを自覚するが、その実は斯の如く信仰することいふことそれ自体が神の力によつて動かされてゐるとなす。彼はユダヤ式に、神は一定の計画を有してそれを実現して行くものとなして、主観的な吾々の生活に客観性を與へることに盡力してゐる。しかしながら此の場合

に於ても神意は豫定せられてゐると云ふのみであつて、神意の内容そのものは吾々には分らぬものと見做されてゐることが注意を要する。ルーターの神の言葉の下へはカントが定言的命令（Kategorischer Imperativ）の担ひ手として考へた意識一般（Apperception）と同一地位にあるものであつて、其所から具体的内容が導出し得るものではない。彼はツヴィングリ（Zwingli）の如く神意に内容を與へ、其所から吾々の行

為を導出するといふギリシヤ的思索に陥らなかつた。斯く考ふれば、吾々はルーターの考への中にドイツ観念論の端緒を見得るのである。

主観的に(従がつて)同時に客観的なるものを求めるといふ考へかあつたれば(こそ)、神セクトの如く主観的な個人信仰を重んじつゝも、猶且つ其の上に客観的な教會を認めることが出来、従つて宗教が他の文化領域をもその下に従属する所の統一文明を認め得るに到つたものであらう。

是と同一の傾向がルーターのサクラメントに対する考へにも表れてゐる。上述の如く彼によれば神人の関係は三はゞ不三帝國に於て成立するものであり、純粋に精神的なるものであるから、信仰といふ内的體験があればキリストと同体になり其の中に取入れられて救はれる筈であり、洗禮・聖餐等の儀式は本来是を必要とせず、其等は内的体験の記號乃至は象徴としての意義を有するに過ぎないものゝ如く思はれる。ツウィングリ等はかゝる結

一般消費組合特製

10×25

論に達してゐるが、ルーターは其所までは進
まない。彼はサクラメントを以て有形の言葉
と見做し、洗禮、聖餐等の儀式に不思議な神
力を認めてゐる。彼のサクラメントに関する
考へは時代によつて多少の相違はあるが、何
れの場合に於ても在来のカトリック教會の如
くに神力といふ実体が吾々の中に注ぎ込まれ
るとは解してゐない。無から有が発生するの
ではなくして、本来源の中にある吾々が神の
力によつて変形（umwandeln）せられるので

ある。ルーターの考へによれば吾々の信仰は
聖神の言葉の働きに基くものである。そして
サクラメントも亦有形の言葉であるから、そ
れは單なる象徴もしくは記号とは異つてゐる。
サクラメントは神の言葉が吾々に働いて信仰
を起さしめ又はこれを強むる一の場合であつて、
儀式の間に真実に神の働きが存するのである。
サクラメントが言葉と異る所以は、後者が説
教、聖書講讀等によつて會衆全体の上に作用
するに対し、前者は洗禮・聖餐・祕密懺悔の

三つの形で各個人に作用するといふ点にある。サクラメントは外的儀式であると同時に内的信仰である。従つて信仰なき儀式は個人に何等の変化をも齎さざるものである。例へば洗禮は、人間が神とは異つて罪の世界に居ると いふことを意識せしめ、之によつて神界に入らむとする欲望を起さしむるものであると同時に救ひに対する約束である。又罪を犯せる場合には秘密懺悔を行ひ、之によつて神に罪を許されると信ずることによつて救はれる

容観的側面ヲ見れば

のである。洗禮により吾々を罪を意識し、神界に生きむとする。かくる信仰は自身神の言葉の働きによるものであつて、かくる信仰が起されれば神の言葉が働いたと云ひ得るのである。濯がるゝ水は依然として水であり、信仰によつて変ずるものではないが、之を信ずるものにとつては聖霊である。水は人間界にとつては水、神界にとつては聖霊である。即ち水それ自身が特別なる救済力を有するものではなく、神の力が働くところに於

てそれが聖なるものとなる。此の水は聖靈と自然的結合と考へられてはならない。

洗禮は「人は水とによりて生れずば神の國に入ることを能はず」（ヨハネ傳三章五節）とあるが如く神の定めた儀式であり、之を通して水は聖靈としての働きを生ずるのである。

聖餐禮は「取りて食へ、これ汝等のために與ふる吾が体なり。」「汝等皆この酒杯より飲め。これは吾が血によりて立つる新しき永遠の契約なり、多くの人のために罪の赦しを得させ

むとて流すところのものなり」（マタイ傳二六章二二、二八節）といふ聖書の語を根據として、信者が共にパンを食ひ葡萄酒を飲むことによつて罪より救はれ、神人合致（Communio）に到らむとするものである。此の場合に取るパンと葡萄酒との性質については、ルーター（Transubstantiation）は初めカトリックの変体の考へを採り、パンは肉に代り、葡萄酒は血になり、之等を取ることによりて人は自然的に神人合致に到り、是かも同時に愛の精神に於て神

と合致する所以であると説いてゐるが、一五二〇年以後は此の形へを捨て、パンはパンとして、又葡萄酒は葡萄酒として残るが、之を信仰を以て食ふときにはキリストの血と肉とを食するときと同一の働きを生ずると考へた。即ち人間界に於てはパンと葡萄酒、神界に於ては愛の精神の表れたるキリストの血と肉とである。是によつて神の愛の偉大なる力を示して吾人の信仰を強め、神人合致の目的に叶はむとするものである。愛するにルーターのサクラメントは感性的にして同時に超感性的なる点に特色を有するものであり、それは実体として見ずして、働きもしくは活動と見ることによつて初めて理解せられるものである。

もしルーターにして斯の如きサクラメントに関する考へを捨てたならば、彼の根本信仰、即ち吾々は罪の子であるにも拘らず神の言葉によつて信仰を生じ、吾々の主観的意志が客観的意志に変化するといふ考へは動揺したであらう。又キリストの死によつて吾々の罪が

一橋消費組合特製

清め、うれるといふドグマに對しても疑ひをさしはさむ余地が生じたに相違ない。信仰によつて個人の意志が神意となるといふ確実性を得るためには此のサクラメントの説を極力主張する必要があつたのである。ツクイングリ等と相爭つたのも此のためである。彼はサクラメントを以て感性的であると同時に超感性的であるとなすことによつて、カトリック教會とセクトとを結びつけてゐる。從つてルーターの云ふ「見えざる」も

のではなく、サクラメントによつて「見ゆる」ものとなつてゐる。從つてルーターの云ふ教會は原始キリスト教の所謂つキリストの名に於て二人以上の信者の集る処、そこに教會がある」といふやうなものではなく、カトリック教會の内面化せられたるもの、純化せられたるものである。

ルーターの思索形式が特別なものであるといふことは、彼の現実生活に對する考へを果キリストのそれと對照することによつて

一般消費組合聯盟
10×25

一層明かになると思ふ。現在生活の各種の行為に對するルールの倫理的判断は大体に於てユダヤ式思索形式をとつてゐる。即ち倫理判断の對象は個人の行為に非ずして、其の行為の主体たる個人、即ち其の人の人格である。彼は個人の行動が愛の精神を以て行はれることを要求するのみならず、個人の人格が愛の精神に依つて統一せられてゐることを要求する。彼は一方に於て「キリスト者の自由について」に於て、「善良にして義しき行ひがあ

Matth. 7, 18.

つて善良にして義しき人が生ずるのではなく、及對に善良にして義しき人あつて善良にして義しき行ひがあつて「悪しき行ひあつて悪しき人が生ずるのではなく、及對に悪しき人あつて悪しき行ひが生ずる」のであり、その故にキリストは「悪しき樹は善き果を結ばず、善き樹は悪しき果を結ばず」と述べたのだと云つてゐる。斯の如く善なることの根據は行ひにはなくして人格にあるが、人格が善なりや否やは一にかゝつて信仰の有無如何

一橋消費組合謹製

10×25

にある。個人は自己の責任を以て信仰を定め可きであり、他人は自己に代つて天国もしくは地獄に行くことが出来ぬと同様に、自己の代りに信仰することは出来ない。各個人は銘々の良心に従つて信仰するのであつて、如何なる権力を以ても之を強制することが出来ないものである。従つてカトリック教会が僧俗両界の「二重の道徳」を主張し、俗人は僧侶の功徳を受けて世俗ふものであるといふ考へ、乃至は法皇は免罪符を発行することによつて衆生

を救済するといふ考へは全く根據なきものである。斯の如くルーターの思索を跡づけて見れば、彼は信仰の問題を専ら個人全体が神に対する関係と見做してゐるやうであるが、更に深く立入つて考へて見ると、彼の考の中には猶ほ二つの的思想とは異つたものがあるのである。

蓋しルーターが個人は神の前に屈伏し、自我を没することに依つて人格を取得すると考へた場合に、神人の融和が如何なる形に於て行はれたかと云へば、前述の如く、個人と神

といふ両実在の中間に実在問題を超えて永遠
帝國を造り、其の中に於て両者は相交通する
のである。即ち神人交通の際に於ける神とは
神の人格それ自身ではなくして、神の言葉に
投映
表映せられた神である。神は言葉に表はれた
範圍に於ては無限の愛によつて統一せられた
人格を有するものとして知られるが、此の人
格は吾々人間に対する限りに於ての人格であつて、神や
それ自身の人格ではない。同様にキリスト教徒
となることによつて取得する人格も、具体的に

実在する人格に非ずして神に対する場合の人
格であり、同じく永遠帝國の住民としての人
格である。此の点が著しくキリストの場合と
は異つてゐる。
キリストの神は実在性を持つて具体的な人
格である。神は絶対の自由意思を有し、隨意
に如何なることをも為し得るものであつて、
其の意思に統一ありや否やといふことは全く
問題にならざる性質のものである。同様に是
と対立する個人も具体的な個人である。個人

は神に対すれば無に等しいものであるが、互に対立する場合には自ら大小軽重の区別がある。従って神人関係以外に於て各個人が相対立する場合には不平等を主義とする弱肉強食経済生活業をなすやうになるが、其等は神に直面する宗教生活に比すれば無に等しきものであり、どうでもよいものとなるのである。又具体的な個人は愛の精神の外に各種の雑念妄想を有するが、其等は愛の精神の火なるに比すれば無に等しきものとして消却せられる

のである。従ってキリストの場合に於ては別に不二帝國に遊ばれして、具体的な個人が直接に具体的な神にぶつかって其の前に屈するものであるから、個人はあるがまゝに全体として神に救はれ、神の子に入る。世俗の生活から離れて出家するのでもなく、又家社會の制度を否認し、之を改革せもとするのでもない。之等はどうでもよいものであり、善とか悪とか、乃至は保持すべきか改革すべきか、といふやうなことは額に血を揚げ

て問題にするほど重大な事件ではない。即ち個人は在俗の生活をなし、其の法則に服従しながら、彼かも其の上に超出し得る。従つて神を信ずることによつて天国は実現せられ、愛の精神のあるところ、其所に天国が存すると云ひ得るのであらう。

ルーターの場合に於ては稍、是と異り、個人がキリストを信ずることによつて救はるといふことは、具体的な個人が全体としてそのまゝキリストと一致するといふのではなく、

オニ帝国に於て各々の霊が神と相通ずといふことである。従つて此のオニ帝国を支配する愛の精神は、具体的な個人にとつては始めは一生を通して努力すべき目標、乃ち倫理的規範となるに止るものであつて、神国が直ちに現在に於て実現せられると云ふやうな性質のものではない。茲にルーターの体験が土台となつて霊肉の対立が高調せられ、天国は霊が完全に肉の束縛を脱する死後に於て初めて実現せらるものと見做される。従つて現在生活は愛

株式会社組合特製

の精神の完全なる実現ではなく、吾々は之に向って不断の努力をなしつゝも、猶其の人間のあさましさで悪行をする。此のやうに斯の如く人は罪の子であるが、しかし乍ら罪は信仰によって許される。斯の如き罪の自覚と悔悛による歓喜の情の中にルーターは満足を求めたのである。

以上ルーターの現在生活に対する見解を述べたが、其の個人道徳が社会道徳となる点に

於て彼の考へは一層明かになると思ふ。ルーターの神観によれば、神は無限の愛の神であり、人は洗礼によってキリスト教徒になれば此の愛の精神を以て行動すすむ純性を與へられるのである。かゝる安心が得られた以上はもつとしては居られぬものである。一方に於ては神に対する感謝の念みるかために、他方に於てはキリスト教徒をして実証せむために、吾々は他に向って働きかけねばならない。此所に於て積極的な活動が要求せ

られるのであるか、ルーターの対世間的活動に対する説明は極めて特色あるものである。

洗禮によつて吾々の靈は清められ、キリストと同体となるすき理想が燃へられるか、吾々は靈の外に肉の要素を有し、之によつて常に神から引離される。洗禮によつて清められた靈は神に依つて命ぜられた厳格なる神法に従はむとしても、肉は常に是に抵抗する。故に靈肉合体たる吾々は肉の力の強い自己を制御せねばならない。肉の力の強い自己を支配

せむがためには難行苦業もせねばならぬし、又此の世に於て本来の他人たる他の人々も、しくは社會の為に奉仕せねばならない。蓋し吾々の現世生活、従つて吾々の社會生活はアダム、エバの墮落によつて、神の天恵による生活ではない。寧ろそれは悪魔のまよはしにかゝつて發生したものであり、吾々は神の力に頼つて其より脱却せねばならぬ。その為には在来の修道僧の如く世を捨て、出家をしても

何にもならぬ。何となれば出家をしたところで肉は依然として自己の要素として一生つきまとふからである。それ故に吾々は現世に止まらねばならぬ。肉を制せむが為には出家することによつては肉を絶つことを

肉を制し、肉を訓練する意味で相対的自然性に従ひ、社會の為め他人の為に奉仕せねばならない。社會奉仕は他人に対する義務でもなければ神に対する奉仕でもない。それは一つの負担であり禁欲である。禁欲とは性を捨てることではなくして、現世に於て自己の職業に勵むことである。所謂此の世に於ける禁欲（innerweltliche Askese）であつて、現世に居ながら現世を克復せむとするものである。最初はそれはいやいや為されるであらうが、肉が訓練せらるることによつて遂には真に愛の精神を以て喜んで之を為すに到る。之が即ち此の世に居ながら肉を脱却する所以である。斯くしてルーターは近世的職業倫理の基礎を築くに到つた。彼は他人を愛することは神に対する奉仕なりと考へ、乃至は力トリック

人は皇の職業に勵むことによつて他人に奉仕し、同時にまた肉を制することによつて一人に神に向つて精神を統一することが出来る。

の如く社會生活それ自身の価値を認めず之に

奉公することが天國に入る前段階であると共に
体す見地を脱却し、個人倫理道德がやがて社會道
德なることを現世的禁慾の方へを以て説明し
た。即ち彼は絶對的自法(然)と相對的自然法の
両者を認めながら、吾々の努力によつて後者
を完全に行ひ得るやうになれば前者に到着す
ることになるとなしたのである。解脱を以て努力の目標
と見做したことに彼の強い罪意識が見られ
るのであつて、此所から彼が絶對的自然法を
理想としての み認めた所以が明かになると思
ふ。

要するに宗教改革當初のルーターには社會
秩序の存へが充分に明かではなく、社會の構
造は與へられたものとして受入れ、之に内的
心意を與へるに止つてゐた。從つて個人の救
害ある場合には、例へば暴利を禁じ、奢侈を退け、道徳を
廃するといふやうなことを主張してゐるが、
全体として社會の構造を見通して是を改革す
る計画は持つてゐなかつた。カールスタット
(Karlstadt)の如き急進論者が教會の改革

と同時に社會の改革をも企てた時も是を制し、社會の急激な改革を為す前に真のキリスト教徒が多数になるやうに努力せねばならぬ、と云つてゐました。めてゐる。蓋しルーターは前にも述べた如く、吾々は宿罪を負つてゐて肉体を制御することが極めて困難なことを自ら体験して居り、又其の當時のキリスト教徒の実状が名前のみキリスト教徒であつても真に其の精神を以て行動してゐるものが數ふるに足らざる状況にあることを知つてゐた為に、制度の改良よりも内

心の改良の方が急務であると考へて保守的な態度をとつたものであらうが、又他の方面からすれば、彼は愛の精神を以て行動すれば是を行ひ得るやうな社會制度は益々完成し、及対に是を妨げるやうな制度は時に触れて廃止することになつて、自然に其の目的を以て の秩序が定まつて行くといふ考へがあつたものと云ひ得よう。即ち各人が肉を支配する他人に奉仕すれば、かゝる行動の間に自おのづから形式が出来て来るといふ古代ゲルマンの共同組合

帝國製紙組合特製
10×25

体（Genossenschaft）の考へ、乃至はゴチックの神殿を貫く精神が表はれてゐる物見得るのである。此の事は彼の教會觀を見ることによつて更に明かになると思ふ。

カトリック教會に於て「見ゆる教會」は法王を中心として階層的構造をなし、皇帝と相並んで此の世を支配する機関たることと、又教會とは神に保つものであるか、それが「見えざる教會」と同一視せらるる為に

總ての信者は教會の構成分子と見做されると いふこと、又セクトに於て教會とは神に倣つて正しとせられた信者の集團であるといふことは前述した如くであるが、ルーターはその何れをも採らなかつた。彼によれば「見ゆる教會」は「見えざる教會」なる理念に指導せられ、是を実現す可く努力する信者の集りである。教會とは個人の集合とか、乃至は個人を超えた存在とか云ふやうに実体的に考へらる可きものではなく、神に向つて努力する信

培進製紙合資会社

10×25

者の行為の内に実現せらるべきものである。教會の本体は「見えざる教會」の理念であり、それは個々の信者の意志に方向を與へる神の意志とも云ふ可きものであるが、それは現在から離れた存在として遠くから吾々を招くといふやうなものではなく、信者の信仰生活の根柢に横はり、信者は日々の行爲によつて之に傳することを実証（Zeugnis）すべきものである。かゝる意味に於て教會の理念は云はゞ可能性であり、それを実

現して行く間に行爲の現実の教會が発生する。而しかるに各個の信者は「見えざる教會」の理念に向つて努力するといふことそれ自身は神の意志の働きによるものであつて各個人の力は之に與らざるものであり、信者は神の意志の働きによつて信仰を起しても人間のあさましさで時々之を失ふことがある。換言すれば集會の中には時々不信者が含まれると考へられる。従つて是に對して訓練を行ひ、指導をなす機関が必要である。しかし此の機関はカトリ

ツクの如く支配者ではなくして指導者であり、信者の上に立つて命令するものではなくして其の陣頭に立つて之を率ゐるもの、即ち教會監督乃至は長老（Presbyter）でなければならない。

又各個人の努力は個人の努力なると同時に神の言葉の働きなるが故に、即ち神の言葉が教會を構成する唯一の原理なるが故に、教會はセクトの如く單なる信者の集團たるに止らず、集團にして同時に客觀的なる実在である。

ある。信者の生活は偉大なる神の働きから発生するものであり、自己の働きが同時に神の働きである境地に向つての不断の努力の過程であるから、信者の生活は單に信者の生活たるに止るものではない。神の生活もしくは全体の生活を個人の信者が營んでゐる否（と云はねばならぬ）

個人の信者は入る境地を目標としてゐるのであるから、神の創造の行為が無限なる如く吾々の努力も亦無限でなければならない。

理想の境地はカトリックの如く繪畫的に描かれ、それと現在の状態とを比較

して現世生活をそれに向って引上げむとする
ものではなく、又セクトの如く只動いとられ
ば自然に神の見えざる手に依って導かれて行
って、神の御心に適ふやうになるといふので
もない。従って教會はカトリックの如く、キ
リストの身体といふ実体があって、その中に
各信者が取入れられることによって成立する
ものではなく、又セクトの如く個人の機械的
集合によって成立するものでもない。各個人
が神意の実現といふ同一目標に向って努しつ

へある状況、それが即ち教会である。故に其
の行為を上から見れば教會の行為であるが、
是を下から見れば個々の信者の行為である。個人
の行為を離れて教会の行為はないと同様に、
個体の行為ならざる個人の行為もない。これ
即ち彼レーダーの教會觀がゲルマンの組合思想
と相通ずる所以である。
組合は同一目的に向って努力する行為の向
に自然に表はれるものであって、其所には指
導者はあるが支配者はない。之と同様に教會に於ては
一般會員組合特質 10×25

ての信者は祭司であつて、各個人は直接に神と交通する者のであるが、各人は夫々神意を體する程度を異にするために、信者の認める長老が指導者となり、教會全体の世話をする。長老の役割はつまり神殿内部の頂点にも比すべきものであらう。

役割は、ルーターは斯の如き国体たる教會を次の如き例を以て説明してゐる。即ち、一市の市民は市の名譽・自由を保持するに勉め、又市全体からは補助や保護を受けると同時に、市民各自は互ひに他の市民の困難を助

ける。教會にあつては困難な地位にある信者に対してはキリストを初め凡ゆる聖者が来つて之を助ける。此の「見えざる教會」の理念の困苦として担せねばならぬ。是によつて真の教会が成立するのである。

（各信者が神に向つて努力すると同時に、）

教會成立の原理は各信者の意思に即しつつ之に方向を與へる神の意思であるから、各の教會はそのまゝ「見えざる教會」の表れであつて、個の教会は全教會の一部分をなすといふやうなも

のではない。即ち個々の教會が集って全体の教會をなすものではない。從って各々の教會の間には調和ある組織があることを必要としないわけであるが、もともと其等は同一天主の表示であるから其間に調和のあることは自然であり、各教會の間にも、一の困苦を以て他の困苦とせんとする組合精神が存在せねばならぬ。是を具体化するものが宗教會議（Synode）である。かゝる関係を原始キリスト教団に於ては神の天然もしくは象徴の形へを以て説明してゐるが、組合

思想で説明してゐる点にルーターの特色が存すると思ふ。

以上はルーターの思想を觀ることによって、其所にドイツ固有の思索形式の存在することを明かにしたものであるが、斯の如き思想を生み出す過程に於ても、彼の態度はドイツ思想の多のタイプを示してゐるやうに思はれる。その過程とは即ち、自己の思想を生み出さんとするに當って、既に他人で乃至は他人によつ

極東貿組合特製

て与へられた思想を徹底的に考へ抜く
二、とによつて其の欠点を覺り、それを他の反
對の思想と調和することを求め、結極両思想
を融合すべき独自の見地を見出し、それによ
つて最初の思想を見直すといふ事が之であ
る。ルーターの場合に於ては英國に起つたセ
クトの思想を身を以て実行して見て行きつま
り、さればとてカトリックでは満足出来ず、
或ひは神秘主義に走り、或ひはアウグスティ
ヌスに赴き、遂にパウロを所縁として解決を

得るに到つた。従つて彼の思想を其の表現せ
られた結果から見ればパウロに似てゐるが、
実際の心持に於てはドイツ固有の特色が表れ
てゐると云はねばならない。これドイツ人が
根本的（Grundlich）であると云はれる所
以である。思想の綜論記述に於ても、其の基
礎付けを中心とし、思想発展の過程に重きが
置かれてゐて、結論が案外あつけないのもか
うした傾向の表れである。此の点英國や佛ラン
スト若しく異つてゐる。これはドイツの文化

橋爪製組合特製
10×25

が他國よりも後れて何時にも指導せられるやうな立場にあつたからでもあらうが、其の後小た所以は英國の如く一面的でなく、又フランスの如く所謂エスプリによる天才的落想に乏しく、鈍重なる風格を有してゐることにも依るものであらう。

振治貿組合特製